

星空の瞬く光は僕の心の中を輝かせてくれる。なぜなら、星には心が宿つていられると言われているからだ。

僕の大本はきつと大きな世界を包むぐらいの優しきで出来ている。そんなことを考えながら、空を眺めていると一匹の鳥が蒼く輝いて飛び去っていった。僕の声に驚いたのかもしれない。

「どうして？ 僕はまだ終わらないよ？」

僕の声は響いているけれど、外の風景を見ている人が誰もいないから、仕方なく椅子に座っていた。隣に誰かがいた頃のことを懐かしい。そして、星は今でも輝いている。

どうしてそんなに眩しいの？ 彼女の声が聞こえた気がした。

それは、紛い物でもなく、ありきたりの物でもなかった。でも、それでいい。

空にゆつくりと光が刺し込み始めた。ずっと、産声をあげたかった子供が笑いながら、空を見つめていた。その子供はようやくと言いつつ、手にある星屑を見つめていた。暗い中、ずっと持ち歩いていて誰に見せるでもなかった。そして僕は、ようやく気付いて笑った。

「……なんだ。たったこれだけのことなんだ」

僕とその少年は空の下の海辺でただ漂っていた。波返す音がゆつたりと聞こえるけれど、今でも待ち続けていたのかもしれない。だから、僕とその少年が一緒に行くことにした。

ずっと、求めていた両親への想いを果たしに――。

街路樹を眺めながら側道を歩いていると、車道を歩く女性がいた。あまりにも理不尽なまでに危険ということをおかつかつていない、とか結構意味わかんないことを考えていると、僕の方を見てきた。女性は何故か、笑顔だった。いや、なんでよ。

「大丈夫ですか？ 私、ここから動けないんです。誰か助けて？」

大丈夫なのは貴女の頭です、とはつきり口に出して言ってみたいが、そんな喧嘩になりそうな言葉は出さないことが無難である。というわけで、無視してまた歩き始める。

「ちよつと！ 私、貴方に言っているでしょ？ その青年さん！」

結構しつこい人なのでしょうか？ 僕の瞳に哀願する視線を一生懸命に伝えてくるめんどくさそうな女性を無視したいのだが、車はやはり来ていない。車道つて車が通る道ですよ？ なんでこんなに運がいいのでしょうか。

と思つたが、やっぱり嫌な女性かもしれないので無視します。

「はあ。やっぱり貴方は私の運命の人ではないのですね。ここに唐揚げがあるのに」

だからなんだよ！ と言いたくなる後半部分の言葉は何だったのでしょうか。僕はとにかく、途端に夜になったほうが驚いた。この人は何をしているんだ？

「じゃあ、ここでじゃんけんをしましょう。それでいいでしょ？」

と、得意面満な顔で僕を見てくるが、人の心を当てたつもりつて言葉が一番似合う、ウザい

顔でした。

「じゃあ、いくよ？ じゃんけん」

そして気付いた。見ているのって、僕の後ろ？ と振り返ると、

「あ、バレたか。まあ、仕方あるまい」

女性の彼氏さんらしき人が僕の後ろでのんびりと空を眺めていた。そして、手にはグーがあった。

僕は何が起きているのかがさっぱりなので、そのまま、そこを立ち退いた。

「しかしまあ、このことが本当になるとはね」

僅かばかりの言葉を零した少年が息も絶え絶えになっっている目の前の少女を見据える。その目には絶望が乗り移っていた。少女のあちこちが破れた服は被害を訴えていた。

「どうして君は、そんなにもボロボロなの？」

心も、身体も、そして運命にすら裏切られた、そんな顔で少女は少年を睨みつける。私の何がわかるってのよ、と言いたげに。

「僕の全てを貸そうか？ それとも、ここで終わる？」

少年は部屋の中にある方天画戟を手に取り、少女の手に乗せようとした。だが少女は首を振り、片方のない手を引っ込めた。

「そうか、なら、ここで終わるんだね」

そして、手から全てが落ちた、少年の表情だけを少女は狂喜に変わっていくのを誰も見ていなかった。

「で、いつまで君たちは僕のところまで来るの？」

「いつまでなんでしようね。でも、君が異世界から来たのはわかっているんだよ。星屑を見つめながら、「僕の大親友は僕である！」って叫んでたじゃん」

「そんな訳のわからないこと言つたつもりはないが」

「でもねえ？ あれは私の者なのよ！ って言っている気がするのは気のせいかしら」

「漢字が違う！」

「どうしてわかる！」

と不毛もいところで、わけのわからない会話を繰り返しながら、僕は我が家の玄関の前にある桜の樹の下にいた。そしてその玄関ドアの前の柵から話しかけてくる、さきほどの二人のカップルは僕に聞こえるぐらいの声で話しかけているのか話しているのか。わからないが、とにかく、僕の邪魔をしていた。

「異世界の行き方を教えてくれたっていいじゃない」

「ダメだ！ 我に齒向かう奴はこの俺が許さん！ だから、懺悔しなさい！」

「だって。誠君はそんなことを言うんだね」

「嘘だ！」

色々ちよつと古い何かの作品の言葉が気になるが、有名すぎて僕でも知っていた、名言であつた。いや、迷言か？ まあ、いいんだ、そういうことは。

問題は、僕の桜の樹の下にあつた、未来を透視できる青い望遠鏡が転がっていたことに由来する。だって、そんな意味不明な道具を扱う人がここにいる気がするんです。そう、僕です。

確かに異世界から来たつてのは間違つていない。この周辺に土なんてないから、カップルには見えない桜の樹の下で一緒に遊んでいた妖精が家の中を色々と変えているのだが。妖精は家の中にある異世界の時の速さを変更して、お客さんを用意してくれて僕に言つたのだ。だから、このカップルに伝えたら、ずつとついてきた。ただのそれだけ。

いや、うざつたいですよ？ もちろん。でも、お客さんに対して悪いことは言えないとテーブルの上にある筆記用具で桜を描いて時間でも潰す。そんなことでもやってないとカップルを邪魔扱いでもしようかと思つてしまうからだ。何か理由があるのだろうか。

「ところで、私達はなんでこんな家の前にいるのかは君はわかるかい？」

「わからないのだよ。だって、私達の幸せを盗んだ野郎がそこにいるのだからねえ」
「私達は取り戻してきたのね！ やつた！ 私達の全てが手に入る！」

「さあ、そこのおじさん！」

全てはスルーでお願いします。そう言いたいが、妖精さんが来たので一旦、

「あ！ 貴方達の後に全てがある！」

「「え?!」」

振り向いた瞬間、僕は妖精さんに引つ張つてもらつて。

「なにもないじゃないか！ つてあのおっさんは？」

「さあ？ まあ、いじりがいかなかったからいいじゃん。帰りましょ」

「じゃあ、次は？」

そんな会話を繰り返している家に背を向けたカップルの背後にはテーブルの上に体温がほんのりと感じられる椅子と桜の樹が佇んでいた。